

いちまいきしょうもん

一枚起請文

(お念佛の心と論された法然上人の御遺訓)

もろこしわがちよう
唐土我朝に、もろもろの智者達の沙汰し

もう
申さるゝ、観念のねんにもあらず。又學問
またがくもん

をして念の心を悟りて、申す念佛にもあ

らず。唯往生極樂の爲には南無阿彌陀佛

と申してうたがいなく往生するぞと思

い取りて申す外には別の子細候わず。但

し三心四修と申す事さんじんし しゅ もうの候ことは皆決定そろうろして

南無阿彌陀佛なむあみだぶつにて往生おうじようするぞと思おもううち

にこもり候そろうろなり。此外このほかにおく深き事ふか ことを

存ぞんぜば、二尊に ぞんのあわれみにはづれ本願ほんがんに

もれ候そろうろべし。念佛ねんぶつを信しんぜん人ひとは、たとい

一代いちだいの法ほうを能よくくくがくとも、一文もんふち不知ぐどんの愚鈍

の身みになして、尼入道あまにゆうどうの無知むちのともがら

に同おなじうして、智者ちしゃのふるまいをせずして、

たゞ一向いっこうに念佛ねんぶつすべし。」

しよりのために、りようしゆいんをもつてす。

爲證レ以ニ兩手印ニ

浄土宗じょうどしゅうの安心起行あんじんきぎぎょうこの一紙しに至極しごくせり。

源空げんくうが所存しよぞん此ほかに全まったく別義べつぎをぞんぜ

ず。滅後めつごの邪義じゃぎをふせがんがために所存しよぞん

を記しるし畢おわんぬ。」

建曆二年正月廿三日けんりやくねんしやうがつにち 大師だいし在御判ざいごはん

聖典と傍訳

もろこし我朝にもろもろの智者達の沙汰し申さるる観念の念にもあらず。

〔私（法然上人）の説いてきたお念佛は、中国や日本で、み佛の教えを学び究められたといわれるような智者たちが、「これまで種々に論議をされてきた、心を静めて真理そのものやみ佛のお姿やその浄土の莊嚴を思い描く觀察によるお念佛ではありません。〕

またがくもん
又学問をして念の心をさとりて申す念佛にもあらず。ただ往生極樂
〔また、み佛の教えを学び、「お念佛の意味を心得てみ佛のお名前を称えろ」といったお念佛でもありません。〕阿弥陀佛の極樂浄土へ往生するために、

のためには、南無阿弥陀佛と申して、疑いなく往生するぞと思いと
〔ただひたすら「南無阿弥陀佛」と称え、
「一点の疑いもなく」必ずや極樂浄土に往生させていただくの

りて申すほかには、別の子細候わず。但し三心四修と申すことの候
〔「とりたてて作法はないのです。』けれども、極樂往生を目指す衆生が心に具えるべき三心や日々の生活の中で念佛行者が振る舞う威儀としての四修というものは、

は、皆決定して南無阿弥陀佛にて往生するぞと、思いうちにこも
〔悉くすべて、必ずやただひたすら「南無阿弥陀佛」とお念佛を称えて往生させていただけるのだ〕と

証のために両手印をもつてす。浄土宗の安心起行此一紙に至極せり。
「以上のことを証明し、み佛にお誓いするために私の両手の印を押します。」「浄土宗において、「お念佛を称える際の心の持ちようとお念佛をはじめとする行のありかたが、この一枚の紙にすべて込められています。」

源空が所存此外に全く別義を存ぜず。滅後の邪義を防がんがために
「私、源空の理解する所は、この他に別の考えがあるわけではまったくありません。」「私が往生を遂げた後、誤ったお念佛の見解が

所存を記し畢。
噴出することを防ぐために私の理解する所を記し終えました。

建曆二年正月二十三日
「建曆二年（一一二二年）正月二十三日」

大師在御判
「法然上人の御手印」

《訳》

私（法然上人）の説いてきたお念佛は、中国や日本で、み佛の教えを学び究められたといわれるような智者たち、これまで種々に論議をされてきた、心を静めて真理そのものやみ佛のお姿やその浄土の莊嚴を思い描く観察によるお念佛ではありません。また、み佛の教えを学び、お念佛の意味を心得てみ佛のお名前を称えるといったお念佛でもありません。阿弥陀佛の極楽浄土へ往生するために、ただひたすら「南無阿弥陀佛」と称え、一点の疑いもなく「必ずや極楽浄土に往生させていただくのだ」と確信して称える以外、とりたてて作法はないのです。けれども、極楽往生を目指す衆生が心に具えるべき三心や日々の生活の中で念佛行者が振る舞う威儀としての四修というものは、悉くすべて、必ずやただひたすら「南無阿弥陀佛」とお念佛を称えて往生させていただけ

り候なり。^{そうろう}

「確信してお念佛を称える衆生の内に、自ずと具わってゆくのです。

此外に奥深きことを存ぜば、二尊のあわれみにはず
「もしも私が「これ以外にお念佛の教えには奥深いことがあるのだ」などとわが心に秘めていたならば、
「釈尊や阿弥陀佛が私たち衆生を救わんとなされた慈悲のみ心に背き、

れ、本願にもれ候べし。^{ほんがん}

「私自身が阿弥陀佛のお誓いになられた本願のお救いから漏れ出てしまうことでしょうか。

念佛を信ぜん人はたとい一代の法をよくよく学すと
「お念佛のみ教えを信じる者たちは、「たとえ釈尊が一代にお説きになられたみ教えをしっかりと学んだ
として、

も、一文不知の愚鈍の身になして、^{いちもんふ} 尼入道の無智^{あまにゆうどう}

「自分はその一文さえも理解のおぼつかない愚かで鈍い者であると自省し、「ただ頭を丸めた
だけでみ佛の教えを学ぶこともなく、俗世間の生活を送っている者と同じ身であると自省し、

の輩に同うして、智者のふるまいをせずして^{ともがら}

「けっして智者のような振る舞いをすることなく、

ただ一向に念佛すべし。^{いっこう}

「ただひたすらにお念佛を称えるべきです。

三心

至誠心（嘘偽りのないまことの心）・深心（自身のありさまを自省し、阿弥陀佛の本願のお力による救いを深く信じる心）・回向発願心（阿弥陀佛の極楽浄土へ往生したいと願う心）の三。「親無量寿経」上品上生に、「三心を具する者は、必ずかの国に生ず（『浄全』一巻四六頁）」とあることから、三心具足の称名念佛によつて往生が叶うのです。

四修

恭敬修（佛・浄土・菩薩・聖典などに対して敬いの心をもつこと）・無余修（お念佛以外の諸行を修めないこと）・無間修（時を隔てずにお念佛を称えること）・長時修（お念佛の教えに帰依したならば、最期臨終の時までお念佛を怠らないこと）の四。

るのだ」と確信してお念佛を称える衆生の内に、自ずと具わってゆくのです。

もしも私が「これ以外にお念佛の教えには奥深いことがあるのだ」などとわが心に秘めていたならば、釈尊や阿弥陀佛が私たち衆生を救わんとなされた慈悲のみ心に背き、私自身が阿弥陀佛のお誓いになられた本願のお救いから漏れ出てしまうことでしょう。

お念佛のみ教えを信じる者たちは、たとえ釈尊が一代にお説きになられたみ教えをしつかりと学んだとしても、自分はその一文さえも理解のおぼつかない愚かで鈍い者であると自省し、ただ頭を丸めただけでみ佛の教えを学ぶこともなく、俗世間の生活を送っている者と同じ身であると自省し、けっして智者のような振る舞いをする事なく、ただひたすらにお念佛を称えるべきです。

以上のことを証明し、み佛にお誓いするために私の両手の印を押します。

浄土宗において、お念佛を称える際の心の持ちようとお念佛をはじめとする行のありかたが、この一枚の紙にすべて込められています。私、源空（法然上人）の理解する所は、この他に別の考えがあるわけではまったくありません。私が往生を遂げた後、誤ったお念佛の見解が噴出することを防ぐために私の理解する所を記し終えました。

建暦二年（一一二二年）正月二十三日

法然上人の御手印

解説

周知のように、法然上人が、往生を遂げられる二日前に、弟子源智上人にお念佛の教えの肝要をお示しになられ、み佛に誓いをたてられた（起請）ご文です。僧俗共々に広く称えられているご文で、「智者のふるまいをせずして、ただ一向に念佛すべし」、この一節に浄土一宗の教えがすべて集約されています。浄土宗大本山黒谷金戒光明寺に法然上人ご真筆の原本が伝えられています。